

## 講演要旨

2018年8月5日 横山繁盛記

鎌倉淡青会公開セミナー@円覚寺

2018年 第1回 7月31日

演題：「白隠禅師に学ぶ」

講師：円覚寺管長 横田南嶺老師

白隠慧鶴禅師は、臨済宗で、本当の意味で禅宗を定着させた。臨済宗には、24の流派があり、初代の栄西が、南宋の禅宗を伝えた。禅宗は鎌倉から室町にかけて広まった。禅問答は、最初は漢文で、書物から学んだ。南宋から渡来した無学祖元は日本語ができず、中国語で禅問答をおこない、中国語で禅を教えた。

室町時代の夢窓国師、大燈国師は中国には行っていない。江戸時代初期の盤珪(ぼんけい)禅師は、中国語は不要で禅問答は日本語でやさしくすべきと説いた。そのあと白隠禅師が出て、日本語による独自の禅問答を定着させた。

1歳(1685) 白隠禅師は、駿河の原宿で生誕し、幼名は岩次郎、生家は裕福であった。優れた宗教家(釈迦、良寛、一休など)は、恵まれた環境で育ち、死に対する恐怖心や、感受性が強く、途中で悟りを開いた。

5歳(1689) 雲を見て世の無常を感じず。

11歳(1695) 母に随って寺に参り地獄の説法を聞いて恐れおののく(その時代は、子供たちに地獄絵により倫理感、道德感を教えた)。母からは天神信仰をするように諭された(天神様の本体は観音様)。

12歳(1696) 拷問で焼けた鉄の鍋を被せられてもお経を唱えて平然としていたという鍋冠日親の話聞き、観音経を唱えながら火箸を体にあてて、ひどいやけどを負う。この後、出家が必要と考え出家を志す。

16歳(1699) 原の松蔭寺にて出家。

19歳(1703) 清水の禅叢寺で修行中に「江湖風月集」の講義の中で、山賊に襲われて死んだ禅僧の巖頭渡子の話しを聞き、出家して修行をしても災難から逃れられないことを知り、禅に失望する。

20歳(1704) 美濃の瑞雲寺で修行、書物の虫干し中に雲棲株宏の「禅関策進」という本を見つけて読み、修行に開眼する。

23歳(1707) 富士山の宝永の噴火があり寺のものが外に逃げるも、神仏が守るはずと堂内で座禅に打ち込む。

24歳(1708) 越後高田の英巖寺性徹和尚のもとで修行中に遠寺の鐘声を聞き豁然(かつねん)として開悟、その後信州飯山の道鏡慧端(正受老人)のもとでさらに大悟する。

**見性悟道—真実の自己に目覚める**

外に向かう心を内面に向ける。

26歳(1710) 京都の白幽子という仙人に内観法を学び、病んでいた禅病が完治する。

### 気海丹田一体を調える

禅の修行のなかで健康法である気海丹田を説いた。

健康という言葉は白隠禅師が始めて使う。

33歳(1717) 松蔭寺に入寺。「大慧書」「禅門宝訓」を提唱する。

42歳(1726) 法華経を読んでいるときに庭のコオロギの声を聞き法華の真理を悟る。

### 常念観世音—観音を念じる

禅宗でなぜ観音経か、修行の目的は、理想の姿が観音様 自分が観音になり他を救う。

### 地獄大菩薩—地獄に下りて菩薩になる

地獄の苦しみを救うため自ら地獄に下りて菩薩になる。

61歳(1745) 延命十句観音経を弘め始める。

71歳(1755) 駿州小島の龍津寺で維摩経を講じた。このとき小島藩主の松平昌信(しげのぶ)が聴聞し、与えた法語が「夜船閑話 卷之下」。しかしその後、藩が登用した役人の厳しい年貢の徴収法に農民が苦しめられ一揆を起こす。白隠禅師の関与で農民の代表は藩主松平家の本家や幕府の寺社奉行に訴え、藩は役人を罷免し年貢の徴収法を元に戻し、一揆は無血で終了した。

83歳(1767) 西島の光増寺で大燈録会を閲読、あまりに参衆が多かったため本堂の床が抜けた。

84歳(1768) 松蔭時にて示寂。

白隠禅師に学ぶことは多い。